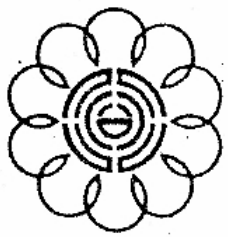
平成６年度

第２６回　越谷市民文化祭

平成６年１１月２０日（日）～２３日（水）

越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　大ホールホワイエ



◇周りの１０個の輪は、昭和２９年１１月３日に合併した十町村である二町八ケ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。

十町村とは、越ケ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・萩島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。

なお、市に昇格したのが昭和３３年１１月３日。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を４個集めたもの。

つまり、越谷の『越』（「コ４」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

第二十六回 市民文化祭の
越谷市郷土研究会作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
一	旧平方村を除く桜井地区の石仏めぐり	1～	加藤 幸一	春日部市 大枝
二	野島地蔵尊の江戸開帳	21～	小原 勘三郎	宮本町三丁目
三	林西寺のご朱印状	23	小島 誠	平 方
四	越谷吾山の碑	24～	鈴木 秀俊	宮本町二丁目
五	長寿と健康の光頭会	26	高崎 力	平 方
六	新川町での『煙草・醤油・砂糖』使いはじめ	27	髙橋 清	新川町一丁目
七	観照院創建時の本尊発見について	28	名倉 さわ	新川町一丁目
八	明治三十二年の流星群	29	西田 茂	谷中町一丁目
九	古利根川の源流	30～	宮川 進	千間台西二丁目

※右の展示作品に関する問い合わせ先は、谷岡隆夫（裏表紙に連絡先掲載）までお願いします。

一、旧平方村を除く桜井地区の石仏めぐり

加藤　幸一

越谷の郷土の信仰や生活史などを解明する貴重な石仏類が開発の波にのって忘れられ、葬られつつある。そこで今のうちに詳細かつ正確に記録したいと旧平方村（昨年度「市民文化祭」で発表済み）を除く桜井地区の主に江戸期の村々の石仏類について調査した。ここにはその概略を紹介する。詳細については大泊の安国寺に資料を置いておくのでご請求（無料）願いたい。

Ⅰ・旧大泊村に散在する石仏類

大泊観音堂は馬頭観音菩薩を本尊として祀り、左甚五郎が一夜で建立したとの言い伝えがあり、馬喰たちなどの参詣で大いに賑わった。堂内右手上方には縁日の賑わいを描いた額絵馬が掲げられている。

この境内には図1の六観音石幢がある。六種類の観音菩薩像が浮き彫りされている。正面から時計回りに紹介すると、如意輪観音、十一面観音、馬頭観音、合掌する観音、千手観音、正観音である。台石には大泊村の名主である高崎三左衛門の名前が見られる。図2の仏は頭上に十面の顔があり、さらに多臂であるので千手観音と思われる。図3・4・5は庚申塔である。主尊である腕が六本もある青面金剛は鬼を踏みつぶし、三猿を従えている。上部には日月が見られる。図7の地蔵菩薩像には輪廻車（後生車、地蔵車）を設置するためにあけた大きな空洞がある。現在は輪廻車はない。図8は『またもとの　くにへ生れむ　たねふくべ』と詠んだ辞世の句を刻んだ石塔である。図10・11は六地蔵を刻んだ石幢である。宝珠と錫杖を持つ地蔵、数珠を持つ地蔵、天蓋（一種の日傘）を持つ地蔵、柄香炉を持つ地蔵、幢幡（一種の旗）を持つ地蔵などさまざまである。

大泊香取神社には、図14の矜羯羅・制多迦の二童子を従えた不動明王像の石塔があり、『成田山』と大きく刻まれている。

大泊安国寺はもと熊谷蓮生坊直実の営む草庵であったという。室町時代になると足利尊氏が夢窓疎石の勧めで国家の安泰と戦死者の冥福を祈って国ごとに安国寺を建立した。この大泊の安国寺はその一つであるという。

安国寺の門を入ると右手には宝篋印塔が目につく。本寺の中興である宏善上人が明治四年三月に再建したもの。左手は墓地。その墓地内には図18の『南無阿弥陀仏　雨請』と刻まれた名号塔、図19の安政コレラがこの地にも流行し被害を受けたために結成された『万人講』の名号塔、さらに明治二十五年に他界した宏善上人の地蔵菩薩座像付き供養墓塔がある。

図18の名号塔の向かって左側面には『かれがれの　いねもあをさに　かへるなり　神のめぐみの　雨のふりきて』との宏善上人の短歌が刻まれている。図19の名号塔の裏面には安政五年に長崎に上陸したコレラが東進して江戸に達した時のこの近辺の様子が宏善上人によって刻まれている。江戸近在のコレラ大流行の当時の様子を知る貴重な碑文といえる。宏善上人の墓塔には数えきれないほどの多くの人々の名前が刻まれていているが、上人の遺徳の偉大さが偲ばれる。

この墓地の南西の隅には、図20の六地蔵石幢、図21の名号塔、図22と23の庚申塔、図25の三界万霊塔や図24の『新六阿弥陀五番』の標識石塔がある。この六阿弥陀参りに関しては近くの平方村の林西寺には四番、大松村の清浄院に六番がある。離れては増林村の林泉寺の二番、登戸村の報土院の三番がある。願主はすべて船渡村の受道である。

Ⅱ・旧上間久里村に散在する石仏類

地元では下堂と呼んでいるこのお堂はもと稲荷山正覚院（真言宗寺院）の跡地である。江戸時代の上間久里村名主である上原家の墓塔が多く見られる。この墓地内に図1の巡礼塔がある。西国三十三ケ所、四国八十八ケ所、秩父三十四ケ所、坂東三十三ケ所のすべての巡礼地合わせて百八十八ケ所を徒歩で巡った記念の石塔である。巡礼の盛んさが窺える。

上間久里の閻魔堂の塀の外の道路側に並べられている石仏類（図2～7）は不動三尊像石塔を除いてはすべて上間久里自治会館北西側道路沿いの地にあったものである。この地にはかつて地蔵堂があったが、道路の拡張にともない消滅した。

不動明王三尊線刻像の石塔はもと閻魔堂北東の今はなき道路沿いにあった。この石塔は明治十八年（一八八五）に不動信仰

のための『神風社』という講を記念して造立されたものであろう。なかなかよく描かれた不動明王三尊線刻像である。

図5の念仏塔の本尊は肉髻と螺髪が見られ、さらに左右の手とも人差し指が伸びていないために阿弥陀来迎印を結んでいる如来像と推定できる。また、この像の両脇には阿弥陀四十八誓願にちなんで四十八名の人名がびっしりと刻まれていて珍しい。

Ⅲ・下間久里村に散在する石仏類

下間久里香取神社は例年七月十五日に行われる『下間久里の獅子舞』（県の無形文化財）として有名。この境内に木製の祠に収められた図1の疱瘡神供養塔がある。江戸時代は疱瘡（天然痘）はとても恐れられ、疱瘡除けとして鍾馗様、鎮西八郎為朝、桃太郎などを赤色で描いた『赤絵』と呼ばれる護符があちこちで売られた。一度この厄を切り抜けて命が助かると免疫となって二度とかからなくなるが、あばたを残したり、失明をする者もでたという。疱瘡神への信仰は庶民の間に浸透した。

下間久里公民館の百メートル南先の道路西側に集会所と墓地がみられる。春日山開演寺（真言宗寺院）の跡地と推定されている。地元では『寮』と呼んでいる。この墓地には筆子（寺子屋の生徒）だった教え子らの五十五人が師匠金子源次郎、かつ（船渡村出身）夫婦のために安政二年（一八五四）に建立した図3の墓塔がある。金子家（下間久里一三八六）の先祖が江戸時代にこの開演寺で師匠となって寺子屋を営んだのであろう。

日光道中から離れて奥まった所にある不動堂は金子家（下間久里一三八六）が代々管理している。不動堂は開演寺境内の一部であり、また金子家とは何らかの密接な関わりがあったのであろう。『越谷市金石資料集』の「普請供養九番」によると、開演寺の建立を示す安永七年（一七七八）六月十日建立の「奉建立開演寺一宇」と刻まれた柱状型の普請供養塔がこの不動堂境内にあるというが、残念ながら今は不明である。願主は下間久里村の開厳法師となっている。

この境内には出羽三山供養塔や百堂巡礼塔、庚申塔などがある。図4は出羽三山供養塔である。出羽三山とは山形県にある

月山、羽黒山、湯殿山をさし、修験道の山々である。三山のうち特に湯殿山は庶民にとって最も崇拝している山である。講中の仲間たちが出羽三山を巡拝した記念として造立したものである。図11は神社仏閣の百のお堂巡りが完了したのを記念して造立したものである。数にものを言わせて功徳を得ようとする百堂巡りは千社参りとともにさかんに行われた信仰である。図8は板碑型をしているので初期の庚申塔とわかる。庚申塔の中には数が多ければ多いほどそれだけ功徳があるとの考えから『百庚申』と刻むものがあるが、図9はさらに欲張って『千庚申』と刻んでいる。

Ⅳ・旧大里村に散在する石仏類

大里自治会館は春日山秀蔵院（真言宗寺院）の跡地である。この墓地には多くの庚申塔がみられる。特に図4は、左手を降ろして女人の髪の毛をつかんでぶら下げるのではなく、左手を上方に挙げて女人をぶら下げる姿を描いているのが珍しい。

図7の大六天とは、正しくは「第六天」と書き、この天に生まれた者は他の作り出した楽しみを自由自在に自分の楽しみとすることができるという。他化自在天ともいう。この天には仏法の妨げをするといわれる魔王の住所があるといい、「第六天の魔王」の魔力で願い事をかなえてもらおうとする信仰のあらわれである。

藤田家（大里八二三番地）の北隣りにある吉田家（大里八二二－一）の旧日光道中に面した入り口北側あたりに数基の石仏類があり、これら石仏類は藤田家が管理してきたという。今は開発の波に飲まれ、惜しくも撤去・処分されてしまった。処分された石仏類の一つに江戸初期の貴重な庚申塔がある。これは『越谷市金石資料集』によると、寛文九年（一六六九）十月二十七日の造立の板碑型で、日月・三猿が見られ、『奉造立石仏□□庚申塔□□』と刻まれた庚申塔であるという。

大里五三四番地の中村家の路傍には図10の庚申塔が建っている。奉納者名を見ると大部分が中村の名前が刻まれている。中村家と縁が深い庚申塔であろう。中村家が代々管理してきている。

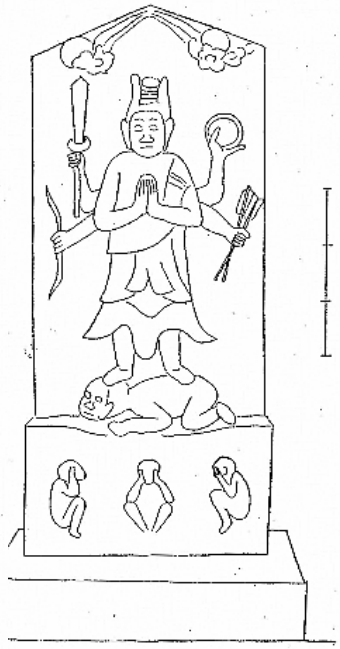
旧大泊村

1. 六観音石幢

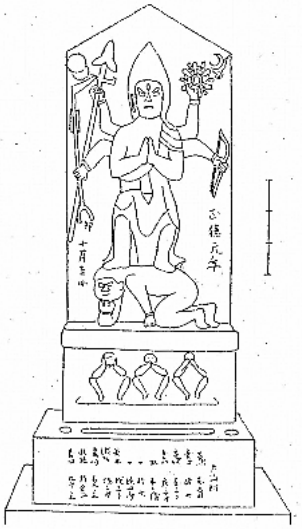
2. 千手観音菩薩像

3. 文字庚申塔

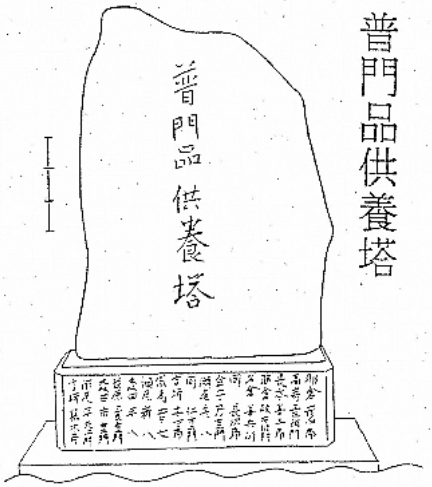
4. 青面金剛像庚申塔



5. 青面金剛像庚申塔

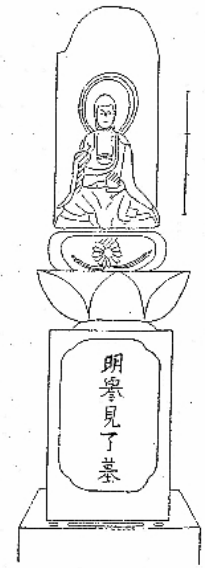


6. 普門品供養塔

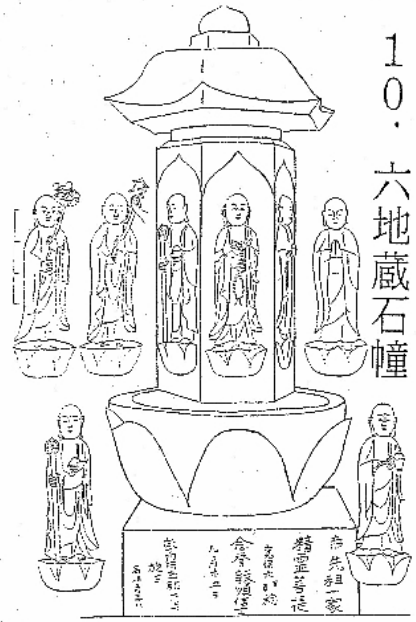


7. 輪廻車付き地蔵菩薩像

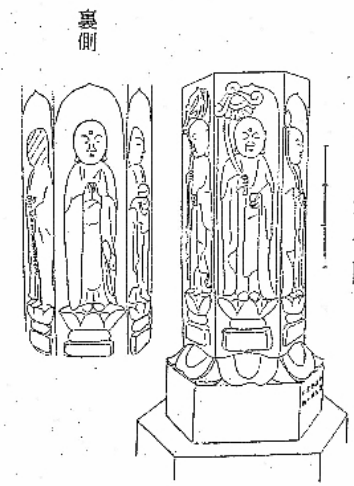
8. 精霊供養塔



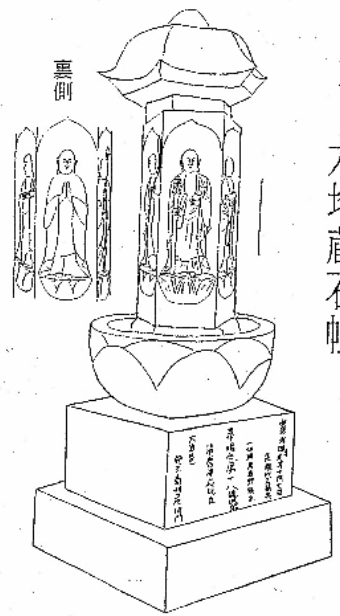
9．地蔵菩薩像墓塔



10．六地蔵石幢



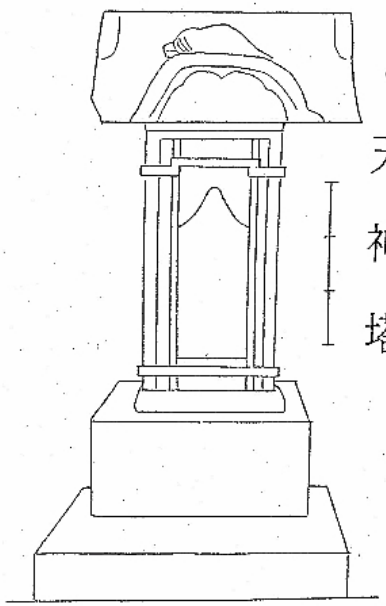
11．六地蔵石幢



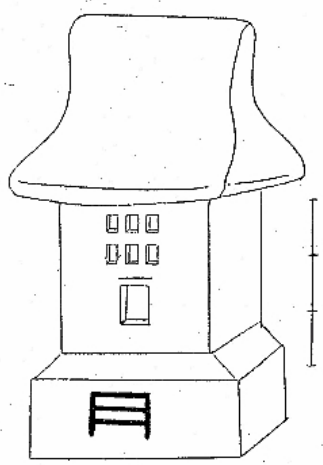
12．六地蔵石幢

13．浮彫三尊像付き墓塔

14．不動明王三尊像

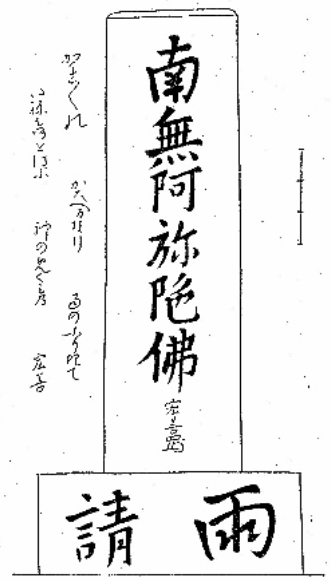


15．天神塔

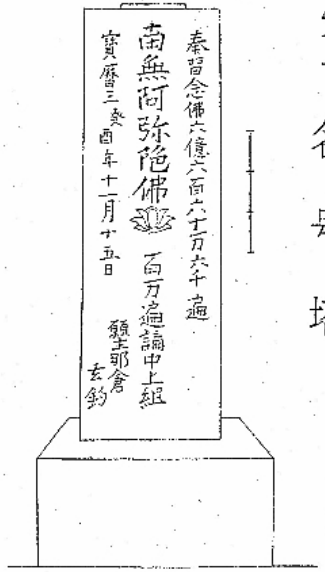


16．四十九院塔

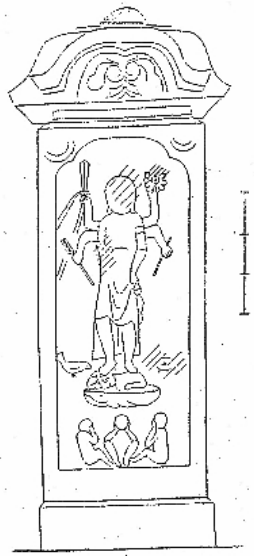
17．『諸願成就』文字塔



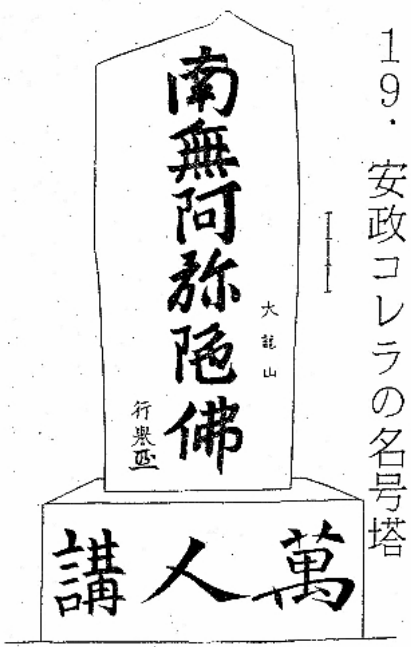
18．雨乞いの名号塔



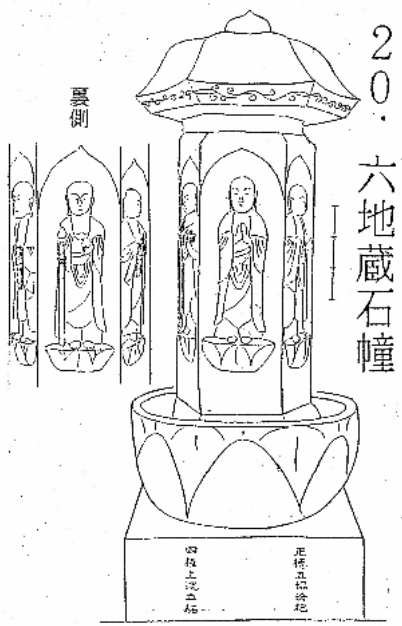
21．名号塔



22．青面金剛像庚申塔



19．安政コレラの名号塔



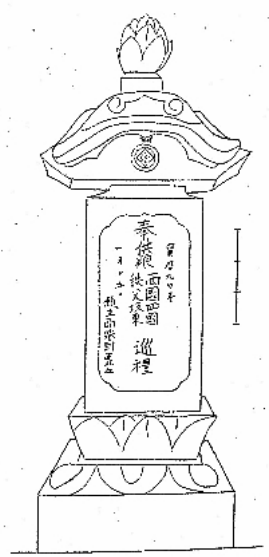
20．六地蔵石幢

23．文字庚申塔

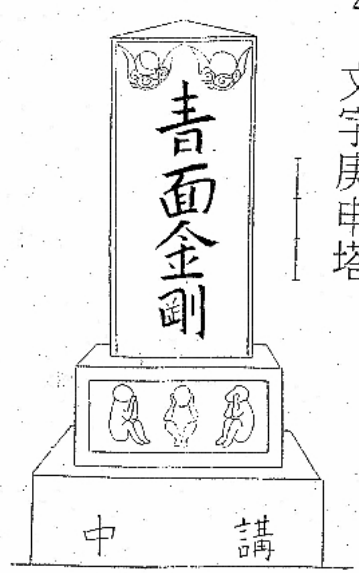
24．六阿弥陀五番標識石塔

旧上間久里村

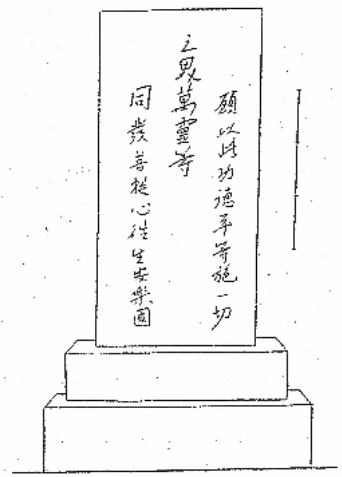
1. 巡拝塔



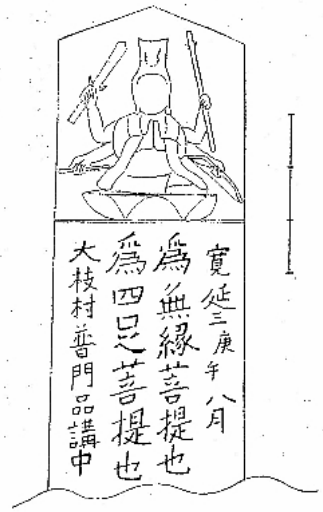
2. 文字庚申塔



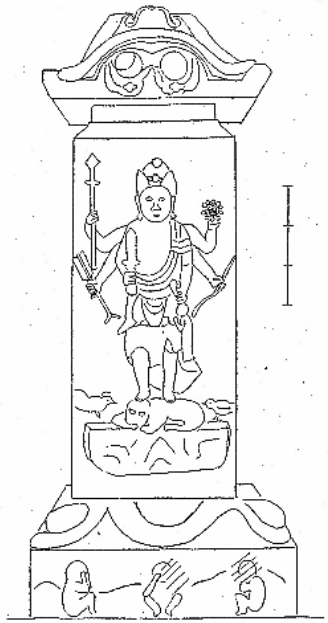
25. 三界万霊塔



26. 馬頭観音像



3. 青面金剛像庚申塔



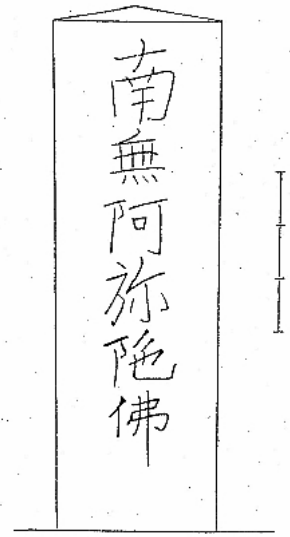
4. 青面金剛像庚申塔

不動明王三尊線刻像(明治十八年)

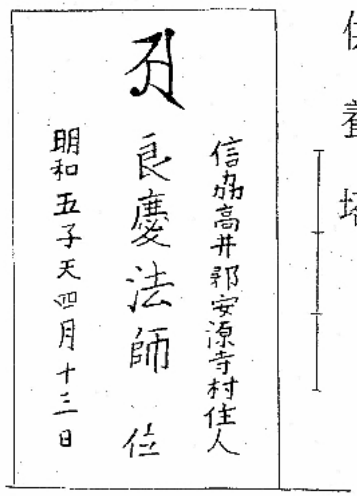
5. 阿弥陀如来像付き念仏塔

上間久里闍魔堂南東側道路沿い

6．名号塔

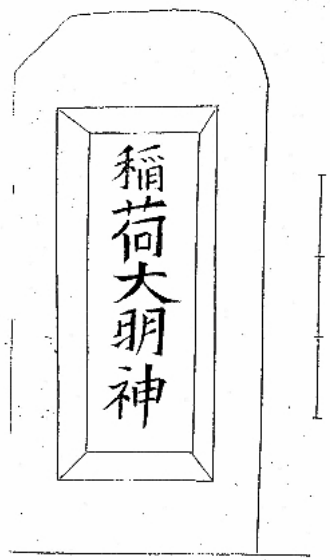


7．供養塔

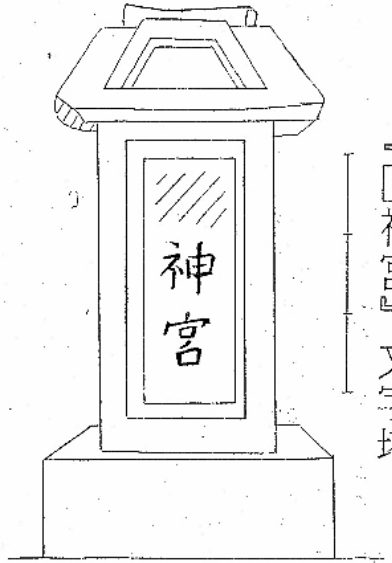


8．『稲荷大明神』文字塔

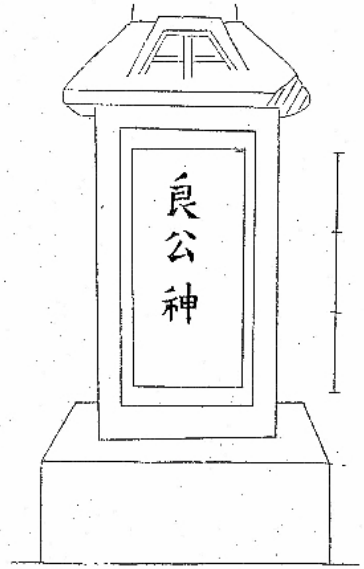
9．『稲荷大明神』文字塔



10．『□神宮』文字塔

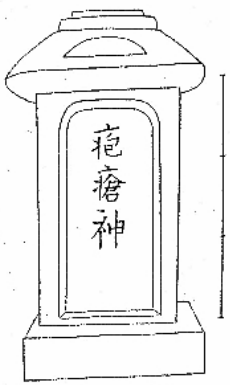


11．『良公神』文字塔

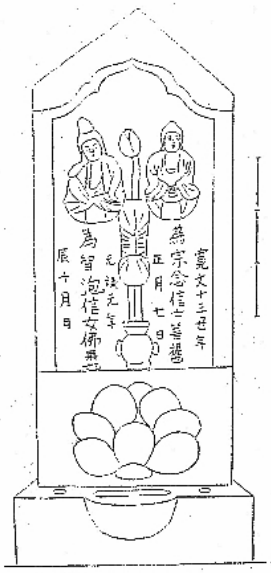


旧下間久里村

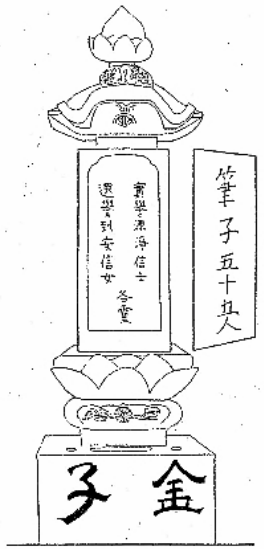
1．庖瘡神供養塔



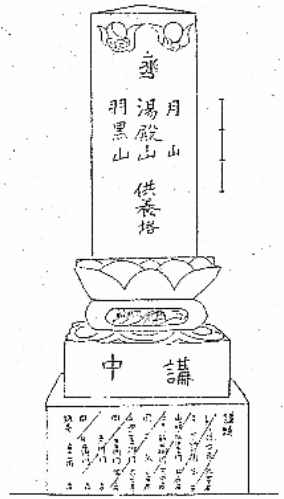
2．阿弥陀・如意輪浮彫り像付き墓塔



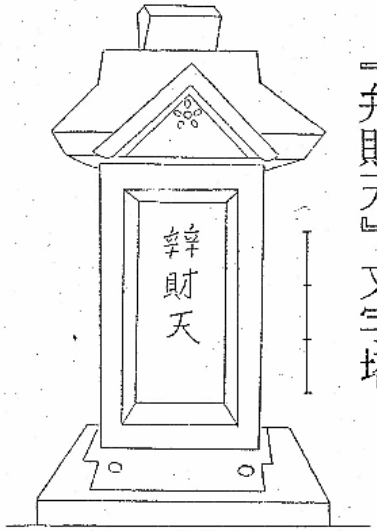
3. 筆子建立墓塔



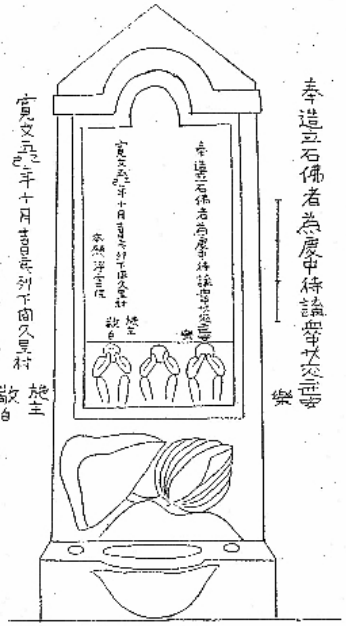
4. 出羽三山供養塔



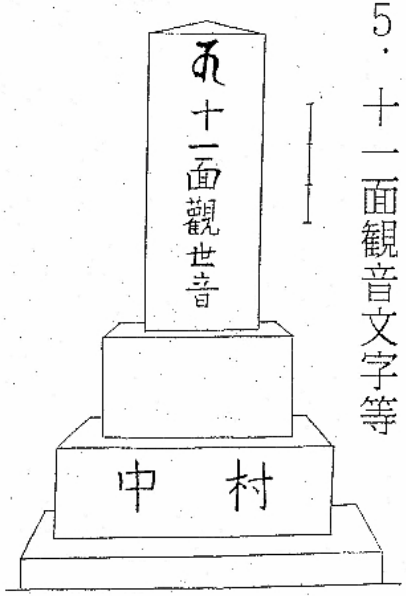
7. 『弁財天』文字塔



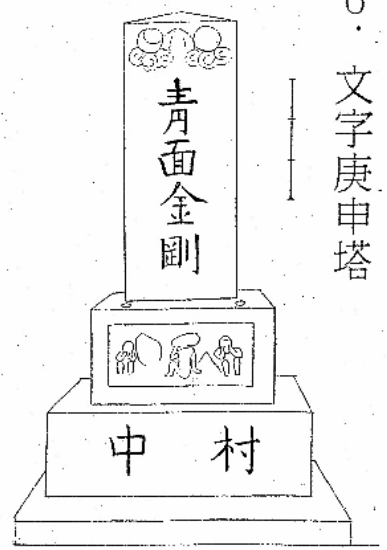
8. 初期庚申塔



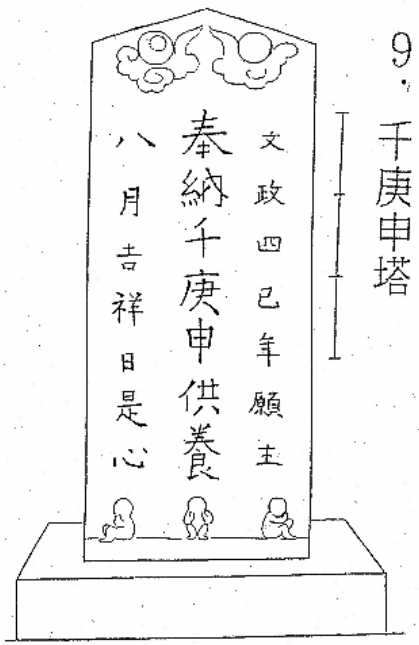
5. 十一面観音文字等



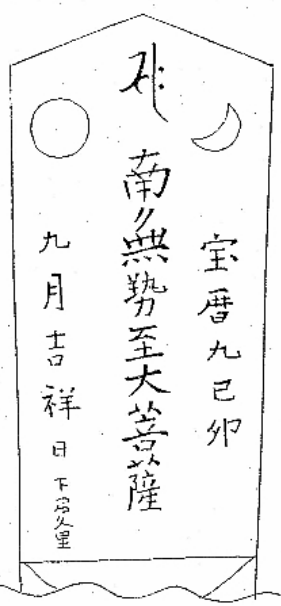
6. 文字庚申塔



9. 干庚申塔

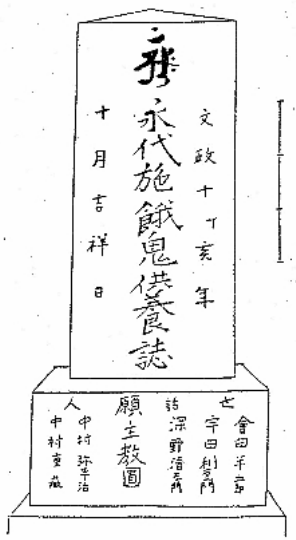


10. 勢至菩薩文字塔

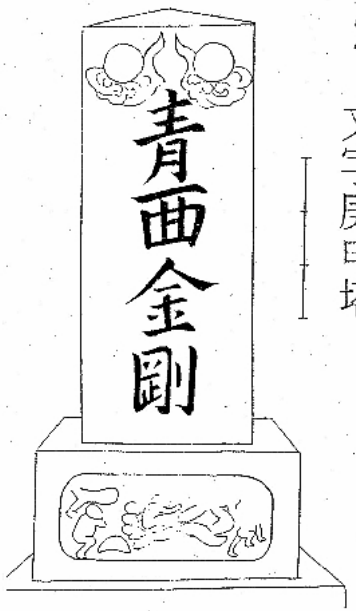


旧大里村

1．永代施餓鬼供養誌塔



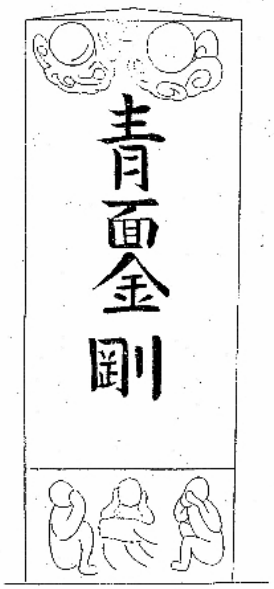
2．文字庚申塔



11．百堂巡礼塔

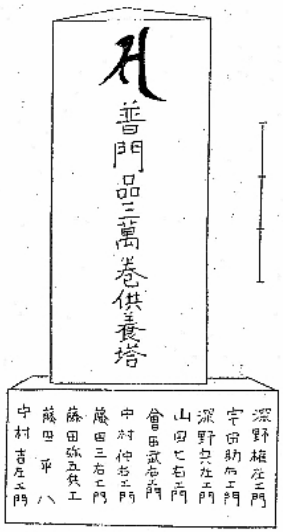
12．青面金剛像庚申塔

3．文字庚申塔

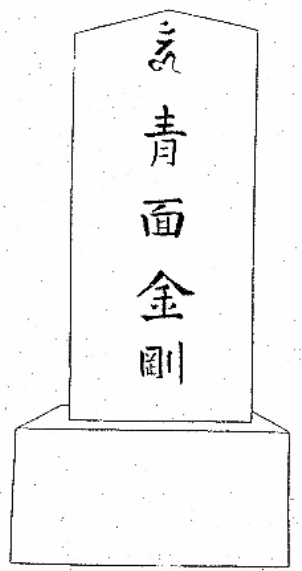


4．青面金剛像庚申塔

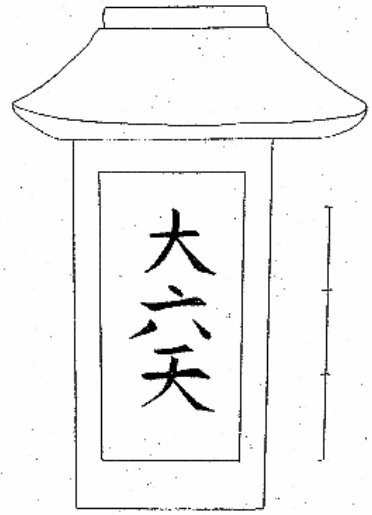
5．普門品供養塔



6．文字庚申塔

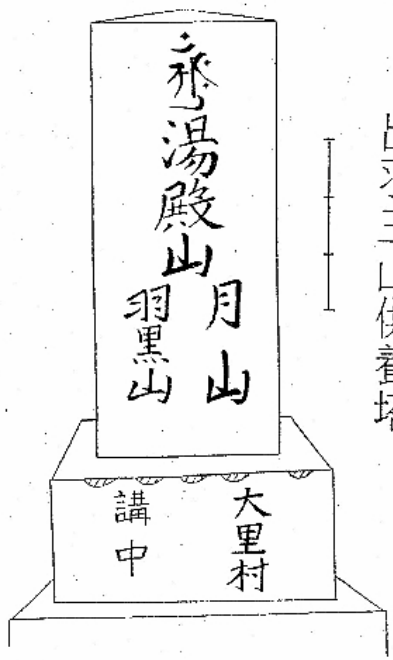


7．『大六天』文字塔

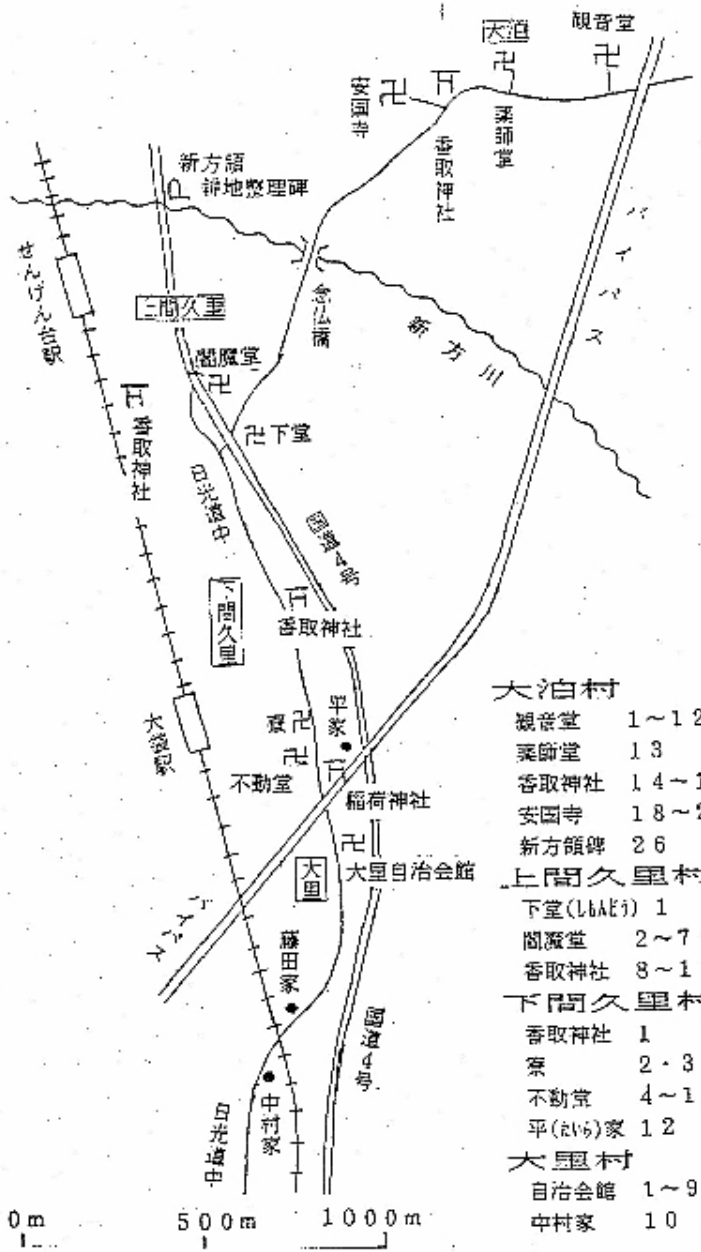


8．名号塔

9．出羽三山供養塔



10．中村家青面金剛像庚申塔



大泊村

観音堂	1～12
薬師堂	13
香取神社	14～17
安国寺	18～25
新方領碑	26

上間久里村

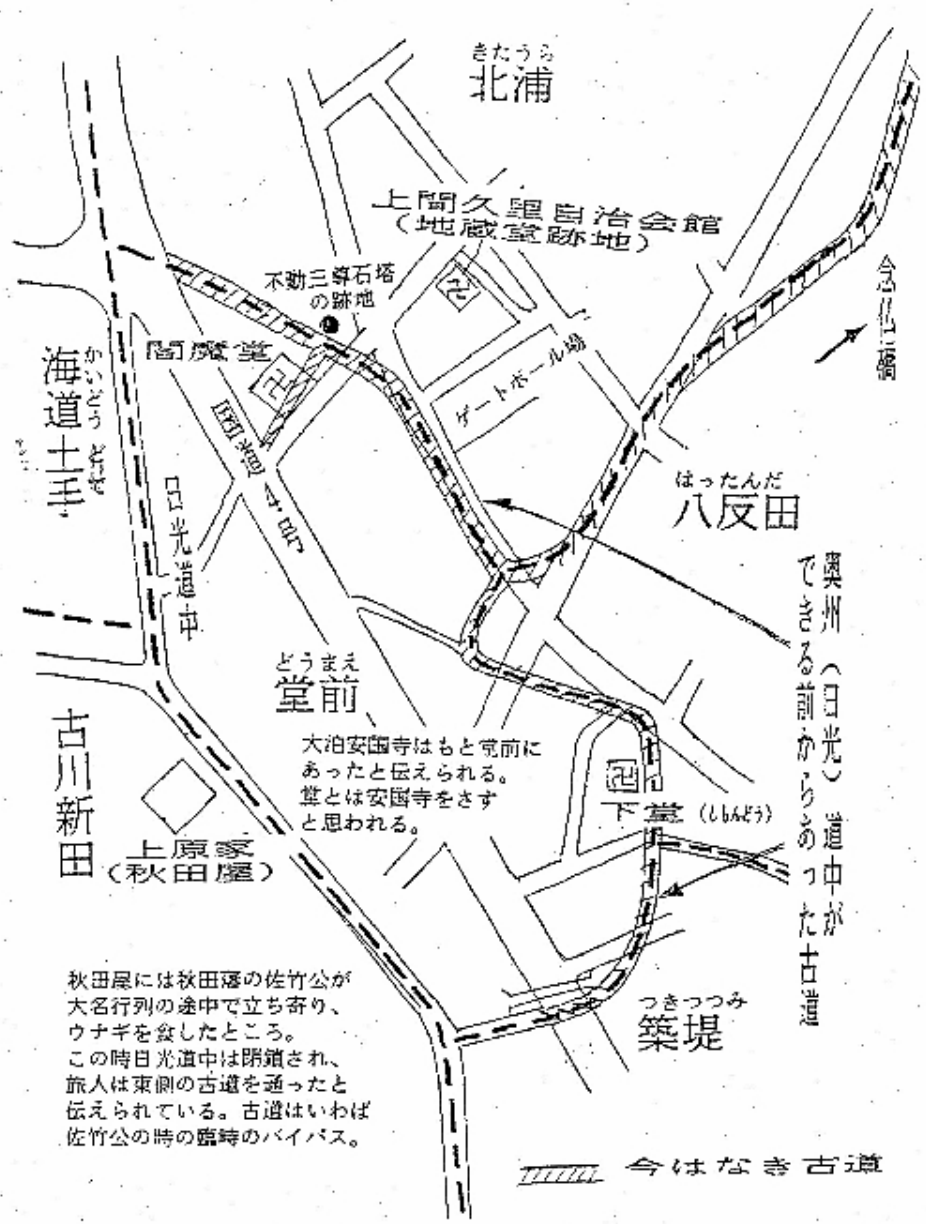
下堂(しもんどう)	1
閻魔堂	2～7
香取神社	8～11

下間久里村

香取神社	1
寮	2・3
不動堂	4～11
平(たいら)家	12

大里村

自治会館	1～9
中村家	10



二・野島地蔵尊の江戸開帳

小原　勘三郎

安永　七（一七七八）年　七月朔日より、湯島社地にて武州埼玉郡野島地蔵尊開帳（浄山寺）。
天明　四（一七八四）年　九月十五日より、十月十四日迄、千住慈眼寺にて、野島浄山寺地蔵尊開扉。
天明　五（一七八五）年　六月十五日より、湯島社地にて、武州埼玉郡野島地蔵尊開帳。
文化十三（一八一六）年　三月十八日より、湯島社地にて、野島浄山寺地蔵尊開帳。
弘化　三（一八四六）年　四月三日より、湯島社地にて、埼玉郡野島浄山寺地蔵尊開帳。
弘化　四（一八四七）年　湯島社地にて、野島地蔵尊開帳（去年の残り日かずなり）。

（武江年表）

野島・浄山寺

開帳

開帳は秘仏を一定期間拝ませ、衆生を済度し、結縁させる行事である。ふだんは拝めない仏を直接拝むので、特別にご利益があることになる。開帳がはじまったのは、室町中期ごろと見られる。

江戸は人口が急増した。江戸の開帳もそのような大きな人口に支えられていた。

江戸で出開帳した地方寺院のうち、成田不動、嵯峨清涼寺、中山法華経寺、下野高田寺についで野島地蔵尊は第五位を占めている。

許可制度

開帳を行うときには、寺社奉行に届け出る。大相撲・芝居と同じく許可制になっている。幕府が正式に許可するのは、春夏秋ごとに五寺ずつであった。ふつう開帳は六十日だが、日延べを出願する。ほとんど許可になっていた。

幕府公認の開帳となると、競争相手が排除され好都合になることが多い。

なかには開帳で一儲けをたくらむ山師も出てくる。しぶる住職を説き伏せて、古道具屋から古仏の本尊らしいものを買ってきて、弘法大師作ということにして開帳をする。

寺社奉行の方では、届け出のとうり行われているかを、毎日、検使が詰めてくる。

本尊が申請どうりでないとして、途中で停止になった例もあった。

本郷・湯島神社

開帳の収支

寺院では経営上、諸経費がかかる。とくに普請のための募財をする必要があった。そこで江戸中期以降になると、賽銭めあてに開帳をするようになった。。

信州善光寺の開帳では、早い時期には二万両も集まったが、回数を重ねると三千両に減ってしまった。

野島地蔵尊の出開帳の収支

安永六（一七七八）年、賽銭や諸経費などの収支は、金二三〇両と銀二貫六〇〇匁余。
天明五（一七八五）年、金五六両と銀一貫三〇〇匁。　（浄山寺文書・口伝書）

一方、出費も多く、寺社奉行対策、江戸までの旅費、宿泊費などがかさむ。

開帳場地代（二十両～四十両）、仮小屋施設費（百五十両～三百両）といわれた。

なかには帰る旅費が調達できず、本尊を売りとばして帰った寺もあった。

開帳をあてこむ

開帳場の境内には、飲食店・見世物小屋・賭博場が店開きし。露天商が立ちならぶ。

嵯峨清涼寺が江戸に出てきたときには、嵯峨おこしを作って売りだし儲ける人もでてくる。川口善光寺ではその時だけ荒川に橋をかけ、橋銭をとる。成田不動の開帳では、そのご利益をテーマにした芝居・小説が出る。

開帳によって江戸中の多くの人々に、いろいろな立場で金が入り、ひいては江戸の経済を活性化させる。

イベント

将軍やその後継者がお参りすると、そのあと、お跡開帳と称して将軍の余香をしのんで本尊を拝ませた。

又、本尊の手から『み手の糸』をのばし、内陣から本堂に出て、『善の綱』につなげる。参詣人が皆でこの綱を握る。本尊と握手したと同じことになる。開帳塔婆は講中が調達する。内陣に張る幕も講中が寄附する。

蝋燭講・お菓子講・高盛り講などがあり、開帳時に講中が率先して行事を盛りたてる。

開帳の初日は開闢、真ん中はお中日、最終日は結願といい、盛大な法要が営まれる。一般庶民は、法要など関係なしに拝み、見て、食べる。江戸という都市の生活が、精神的にも物質的にも充足されるイベントが開帳であった。

「越谷市史」「東京百年史」「文京区史」「武江年表」「江戸の開帳」

三・林西寺のご朱印状

小島　誠

写真は、越谷市大字平方の「白龍山月照院林西寺」に越谷市の「有形文化財」として、大切に保管されている朱印状です。縦四十六㎝、横六十五㎝の厚手の和紙に、毛筆で書かれたものです。

写真①徳川第九代将軍家重
写真②徳川第十四代将軍家茂

朱印状とは、江戸幕府が天領（御料地）と称する直轄地を全国各地に有し、これを寺社などに寄進する旨を記した書状のことです。

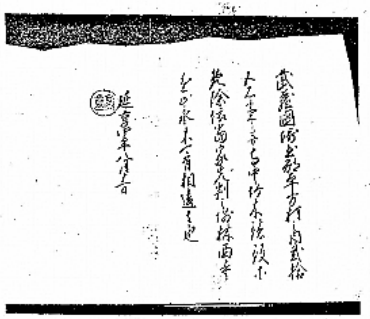
将軍交替ごとに切替えをするのが常でしたが、時の事情によって行われなかったこともあったとのことです。

本寺のように「徳川十五代」中、十二代もあるのは稀でしょう。

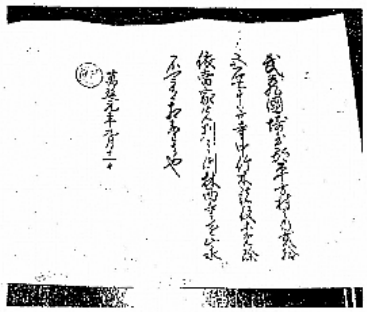
「しゅいん」について遡れば、「手印」と書いて「しゅいん」とも「テイン」とも読みます。願文・置文を書いたとき、手に朱印をつけて押したものを「押手」とか「手形」といいました。

また、武将が政務・法令・軍事などの文書に「花押」のかわりに印章を用いるようになり、「朱印」をつかったものを「朱印状」といいました。

江戸末期には、「印」の黒・朱にかかわらず将軍の発行したものを総て「朱印状」といい、さらに「ご朱印状」と敬称を付するようになりました。



第九代将軍家重朱印状



第十四代将軍家茂朱印状

朱印状読み下だし文

①

②

③

四　越谷五口山の碑

鈴木　秀俊

ここに展示した四枚の写真は、越ケ谷の出身で江戸期最大最高の全国方言辞典「諸国方言物類称呼」を編集出版して、方言学の始祖といわれ、また俳諧師として、法橋の高位に座した越谷吾山の業績を偲んで建てられた碑である。

写真①　市指定文化財。久伊豆神社神池の端にある句碑。

表　出る日の　旅のころもや　はつかすみ　、法橋吾山　　霞翁□

裏　嘉永二己酉正月十三日（吾山歿後、六十三年にあたる）

伊勢六々講中　越ケ谷宿（四人の氏名がある）大沢町（三人）

自然石で高さ一一五㎝、幅は九〇㎝。

写真②　天嶽寺参道入り口の碑　（破損）

表　越谷吾山翁墓碑　在寺

裏　百五十年回忌為　同族浜野吉之助　昭和九年十二月十七日建之

写真③　天嶽寺赤門前、向かって左側の句碑。

表　ひとつるべ　水のひかるや　けさの秋　吾山

裏　百五拾年忌記念建碑

師竹尾吾山は越ケ谷の人、姓は会田氏、名は秀真、信濃の名族海野氏なり。方言を究め、俳諧を好み、柳居、沾山（せんざん）に学ぶ、法橋に叙せらる。曲亭馬琴の師なり。

天明七未歳十二月十七日、七一歳を以て江戸に歿す。

著すところ、物類称呼、翌桧（あすなろ）、朱紫等あり、月と汐。

④

写真④　越谷吾山墓碑
正面中央　法橋往誉吾山師竹居士（左側面天明七未歳十二月十七日）

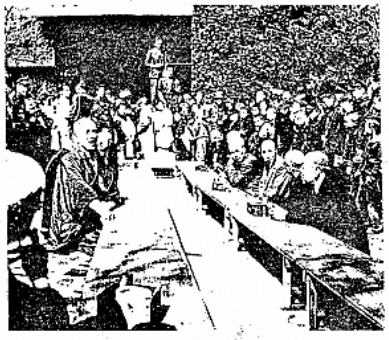
発起人総代　志田素琴、東条操、大田栄太郎、有瀧七蔵、会田利治郎、当山三十世模本一成。　石工　小島勝
昭和九年十二月十日

越谷　吾山は、越谷新町の名主会田久右衛門家（現会田圭家）の出自。享保二年（一七一七）に生まれた（会田文之助）。若年の頃から各地の文人と交流、とくに俳句を好み、江戸の俳諧師佐久間柳居に入門したのは二四歳の頃といわれる。寛保三年（一七四三）師の柳居編『芭蕉翁同光忌』（芭蕉翁五十四回忌追善集）に「うぐひすの　子もしほらしや　手向経　吾山」外一句。寛保四年柳居の『安実陀経』に「この寺の　人参太し　大根引き　吾山」外四句がある。延享五年（一七四八）柳居没。明和の初め頃、沾山（二世）の門に入り判者となった。沾山没後は独立して判者となったという。

明和六年（一七六九）五三歳の頃、越ケ谷を退転、江戸馬喰町一丁目東よこ町に移り住む。安永三年（一七七四）日本橋に転居、師竹庵となのる。歳旦帖『艸右記（そううき）』刊行。安永四年『物類称呼』の初版本を刊行。安永五年『東海藻』刊。安永六年六月十一日法橋に叙せらる。同年『和漢通記』成る。安永八年『雅言俗語翌桧（あすなろ）』刊。安永九年渉無庵太初の『閑古鳥』（柳居三十三回忌追善集）に「見定める　うちに飛けり　かんこ鳥　吾山」。天明三年日本橋より堺町へ移る。天明四年『朱紫』刊。『俳諧月と汐』も同じころ刊行。天明七未年（一七八七）七一歳をもって没した。深川霊巌寺に葬られる。（のち、天嶽寺に移す）

天明九年、吾山一回忌追善集『雪を花』刊行。（息・貫四編、春蟻・菜陽後見）。吾山辞世「華と見し　雪はきのうそ　もとの水」。寛政三年（一七九一）滝沢馬琴（吾山の門弟）『岡両談』（吾山三回忌追善）成る。吾山を語る貴重な資料。

【参考文献】杉本つとむ著「越谷吾山」　さきたま出版会



長寿と健康の光頭会

高崎　力

古梅園の名残りをとどめる北越谷の浄光寺境内において、初めての光頭会が開催されたのは、昭和二十六年（一九五一）、梅の香匂う春三月である。

発起人は、埼玉県四区選出国会議員や地元有志、それに県知事や新聞社の協賛を得て、市域をはじめ埼玉東部地域から光頭自慢の各界の名士が勢揃いし、お互いの長寿と健康を祝福し、昔話・自慢話に花を咲かせた。

娯楽の少なかった頃だったので、東武沿線一帯から老若男女の大観衆で浄光寺境内は終日賑わった。

参加者はこの日に備えて、光頭に怠りなく健康の保持増進に努めてきたので、甲乙決め難く、厳正なる審査によって入賞者が決められた。

賞品は光頭にちなみ、電球・洗面器・ヤカン・蝋叩きなどであった。

特に盛況だったのは第四回で、この日は女優三名を迎えて撮影会も開催され、記録映画は遠くブラジルにて上映されたという。

六・新川町で「煙草・醤油・砂糖」の使いはじめ

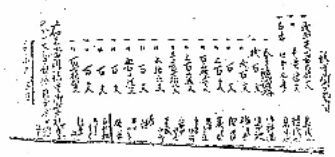
高橋　清

（新川町一丁目備社年番引継帖・買物記帳より）

備社年番引継帖

醤油

たばこ



白砂糖

一、煙草

「一、たばこ」

天和三（一六八三）年の当初より買物記帳に出ている。

煙草は、天正年間（一五七三～一五九一）に伝来し、寛永年間（一六二四～一六四三）に弘まったとされている。

刻み煙草は、元禄年間（一六八八～一七〇三）から盛んになった。

当時、流行の先端をきって村人たちは、祭礼に限り喫煙したらしい。

二、醤油

「一、百参拾弐文　醤油」

備社年番引継帖には、醤油をはじめて購入したのは、寛政二（一七九〇）年となっている。その後、江戸文化が爛熟した文化・文政時代（一八〇四～一八三〇）となり、庶民も醤油で味つけした料理が食べられるようになった。備社祭礼の料理は、当時のグルメの魁であったようだ。

三、砂糖

「一、銭百文　白砂糖」

備社年番引継帖の記載によれば、嘉永五（一八五二）年にはじめて購入している。この時代から砂糖の消費が一般化したらしい。

ヨーロッパの資本主義の大波が、世界中に押し寄せ、日本近海にも外国船の来航が頻繁になってきたころである。

七・観照院創建時の本尊発見について

名倉　さわ

厨子

胎内仏

平成六年七月、観照院不動明王像（お前立）の修補に際し、胎内仏と墨書された経木が発見された。発見された胎内仏は、不動明王立像で、身の丈一寸三分、岩座三分、総丈一寸六分の鋳仏（金銅仏）である。

厨子に入っており、常時、携帯するよう工夫された像である。

観照院の寺伝によれば、一六一六（元和二）年、会田七左衛門政重公が当地開発に先立ち、工事の安全祈願のために同寺を建立したとなっている。

しかし、巷間に流布されたのは、政重公が先祖の菩提を弔うために建立したことになっている。

工事の安全のために建立されたとすると、阿弥陀如来を観照院の本尊としていることが、同寺では以前から疑問とするところであった。

経木の表面には、元禄十丁丑年四月十三日の日付と、「是の大明王は其の住所無く、但、衆生の心想の中に住む」の不動経の句と、「右ノ此ノ鋳佛ハ弘法大師之御作也。此ノ木像修補ノ時、御腋ニ籠ラセ奉ル。末世、修補ノ節モ又斯ノ如ク籠ラスベキ也。若シ盗取者ハ必ズ罪ニ堕チル者也。法印哲道」とあり、裏側には「観照院本尊」と明記されている。

面表経木

今回、ご住職（観照院第二十二世憲道住職）による発見により、同寺の古来からの本尊は、新発見のこの胎内仏であることがわかり、今までの疑問が解明された。観照院創建時、あまりに小仏像であったため、木像の不動明王を安置し、本尊とした。さらに新たな本尊を安置し、この時、最初の小仏像を胎内に納めた。やがて、阿弥陀如来を勧請し、それまでの本尊より立派であったため、いつしか、観照院の本尊とされた。

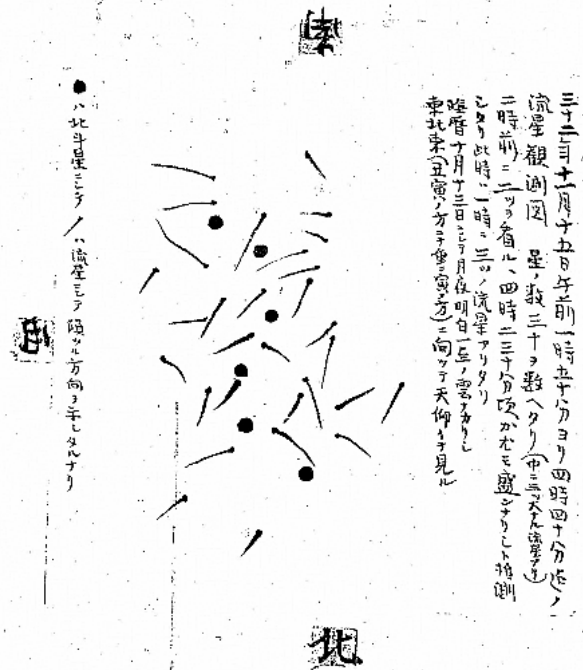
面裏経木

本尊を胎内に納めたことが伝えられないまま、今日に至ったと考えられる。

八・明治三十二年の流星群

西田　茂

この図は、一八九九（明治三十二）年十一月十五日に出現した「しし座流星群」を、祖父がスケッチしたものである。丸印は北斗七星を示す。



明治三十二年流星観測図

「しし座流星群」は、三十三年周期で太陽を回っているテンペル彗星の地球の軌道上にまき散らした塵が、地球の大気に突入し、流星となる。

「しし座流星群」は、毎年十一月十七日ごろを最大として、前後十数日活動し、「しし座」に中心点をもつ。

過去千年にわたって、三十三年の周期をもって大出現する。

明治三十二年には、母彗星が近日点に帰ることが予想され、大流星雨が期待された。新聞などで予報されたものと思われる。

しかし、流星は予想より少なかった。

これは、彗星が一八九八年に木星に接近したため、軌道が変えられ、流星群の密集部が横道へはずれたためと考えられる。

この流星群の記録は東京天文台にもない。予想より少なかったとはいえ、このスケッチは貴重な記録である。

九　古利根川の源流

宮川　進

◎私たちの越谷市の東端を流れる「古利根川」の源流は、どこにあるのでしょうか？　源流といえるポイントは五つあるといえます。

①一つ目は、いま、古利根川を流れている水の大部分を占めている「利根川」の水源です。これは群馬県水上町大字藤原にある標高一、八五〇mの大水上山にあります。水源は、なかなかわからず、六〇年かけて探され、ようやく、昭和29年に発見されました。

②二つ目は、同じく「利根川」に河川法が適用される区域としての源流です。これは、水上町の大字大利根にある剣ヶ倉沢合流点です。

③三つ目は、この利根川から水をとりいれ、古利根川に流しいれている「埼玉用水路」の起点です。埼玉県行田市須加にある水資源開発公団「利根導水路須加種管」です。

④四つ目は、江戸時代に、古利根川を流れる水をとりいれていた「葛西用水元圦」です。ここは、いま、閉鎖されていますが、附近に前述の埼玉用水路から古利根川の上流である「葛西用水」へ流す水を分流している「葛西分水工」があります。いま、古利根川を流れる水の実際的な源流は、この地点にあるともいえます。

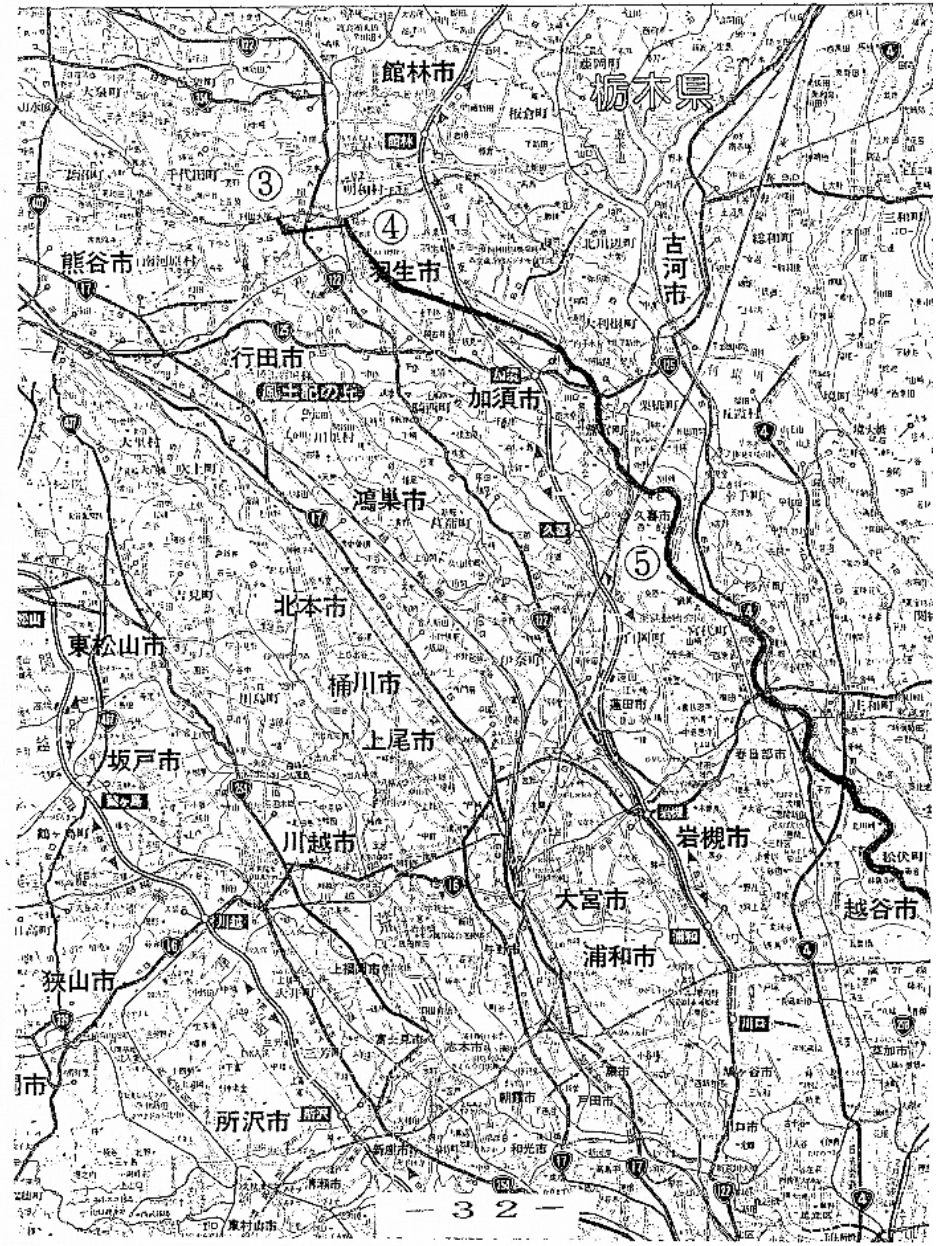
⑤五つ目は、大落古利根川の起点としての久喜市大字吉羽下河原です。ここは「葛西用水」と青毛堀川との合流点であり、いま大落古利根川の正式起点です。

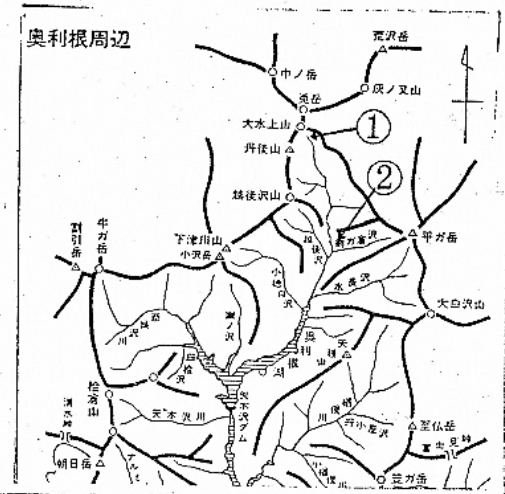
ここで、古利根川の水の流れる順序を整理しますと次のとおりです。

利根川→埼玉用水路→葛西用水→大落古利根川（いわゆる古利根川）

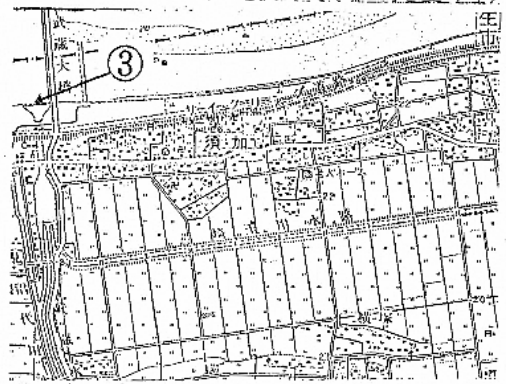
このように、五つも源流のある、不思議な川・古利根川に流れる水は、昔のように群馬県の大水上山から流れ出たものです。深い山のなかの樹木の葉にやどった露が集まってできた一しずくの清水をもととする、この川の水をほかの川の水と同じように、すこしでも汚すことのないよう努めてゆきたいものです。

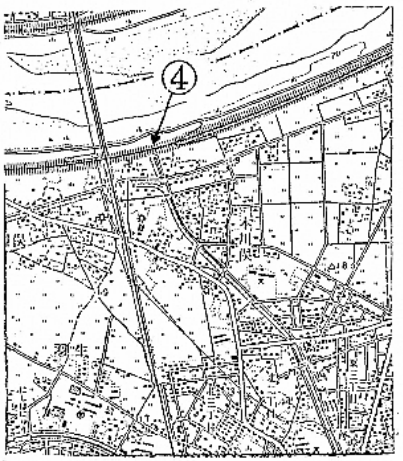
古利根川流域略図

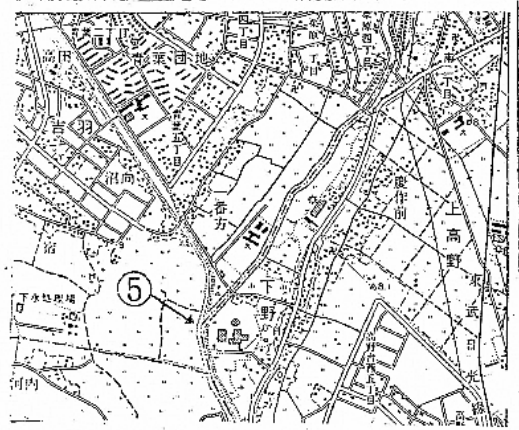

館林市
栃木県
③
④
熊谷市
羽生市
古河市
行田市
加須市
鴻巣市
⑤
北本市
東松山市
桶川市
上尾市
坂戸市
川越市
岩槻市
大宮市
越谷市
浦和市
狭山市
所沢市


奥利根周辺
①
②
大水上山
丹後山
越後沢山
平ガ岳
笠ガ岳

(水源地)
大水上山
1850
丹後山
1809
平ケ岳
2141
2228
土樽
群馬県
赤城山
1674
榛名山
渋川
前橋
高崎
伊勢崎
太田


③
須加


④


⑤
吉羽
上高野